Interview

「納涼野火止寄席」での駒与志さん

駒与志社中　左から夜楽、駒与志、桃介、慶馬のみなさん

「絆プロジェクト 2030」チャリティー落語会で

著書『落語で読む法律講座』(皓星社)

本業 弁護士ときどき、落語家

弁護士　菅原貴与志さん（落語家　金原亭駒与志さん）

菅原貴与志さん（57歳）は本業、弁護士そして慶應義塾大学法科大学院教授。それだけではなく、この方のもう一つの顔は何と落語家。金原亭馬生師匠から「金原亭駒与志」の名前をいただいた、金原亭一門の客分（二つ目格）として活躍中の実力派なのです。

駒与志さん今後の出演予定

- ■霞が関寄席「金原亭馬吉・駒与志二人会」
  12月3日（水）19時霞が関ナレッジスクエア
- ■新春野火止寄席　1月24日（土）14時
  東久留米市野火止地区センター
- ■銀杏寄席　2月7日（土）14時　東久留米市成美教育文化会館
- ■恵比寿寄席「金原亭駒与志独演会」2月14日(土)14時
  渋谷区地域交流センター新橋

「駒与志社中」を主宰

8月23日、東久留米市野火止地区センターで開かれた「納涼野火止寄席」に出演。同センター図書室管理運営委員会が主催したもので、観客30人余のアットホームな落語会。ここは駒与志さんの地元でもあります。その駒与志さんが主宰する天狗連「駒与志社中」の4名が出演。皆さん慶応義塾大学落語研究会OB・OGで、それぞれが一席ずつ古典落語を熱演。全員、本職がある身ながらプロ顔負けの噺家ぶりで、聴く人々を大いに笑わせていました。控室でも和気藹々、先輩、後輩ともども落語談義で楽しそうでした。

それから2週間後の9月6日、所変わって渋谷区地域交流センター新橋。東日本被災地のこどもたちを支援する「NPO法人絆プロジェクト2030」のチャリティーイベント「金原亭駒与志落語会」に出演。4回目のこの日は150人余の観客の前で2席を披露。トリを務めた「鹿政談」は奉行の名裁きと豆腐やの話。迫力ある奉行の声音と豆腐ややか細い声とのやりとり、その情景が浮かんでくるよう。じっくりと聴かせて、最後はオチで笑わせ…すばらしい技量でした。それもそのはず、この夏真打昇進が決まった、金原亭門下の兄弟子、馬吉さんと霞が関寄席「馬吉・駒与志二人会」を年2回開いているのです。毎回満員御礼の盛況で、贔屓筋がいっぱい。おのずと、その実力の程も分かるというものです。

落研で大活躍

札幌市の出身。落語との初めての出会いは小学3年の時。母親が病弱で、長く入院していたこともあり、夏休みや春休みは東京の親戚宅に預けられていました。遊び人であったという大伯父さんがよく連れて行ってくれたのが浅草の寄席。「目の前で落語家や芸人さんが、さまざまな芸を見せてくれるのが面白く、寄席の雰囲気が好きでした。中でも金原亭馬の助の大ファンになって、将来噺家になるならこの師匠に弟子入りしようと、子供心に決めていたくらいです」菅原少年を魅了した寄席演芸の体験が、落語家としての原点となっているようです。

中学、高校時代は柔道部や弓道部に属し、弓道では国体の強化選手に選ばれたことも。慶応義塾大学法学部へ合格し上京。そこで勧誘されて入部したのが落語研究会（落研）でした。少年の頃聞いていた落語が甦り、メキメキ頭角を現した菅原さん。2年の時大学対抗戦で他大学の4年生を破って、賞を取ったほどでした。

当時は大学落研の全盛期、五代目恋生の芸名で活躍。女子大の学園祭にひっぱりだこで、恋生ファンクラブ

までいくつもできていたそうな。しかし稽古は厳しく、地獄の合宿、上級生のしごきに耐えつつ、週に1度は寄席に入り浸り、貪るように噺を聴いていた落研時代。殊に夢中で追っかけていたのは談志。圓生、小さん、志ん朝など当時の落語家に裏切られることはなかったと言います。

「プロになろうかとも本気で思ったのですが、落語じゃ食えないなぁと…一人っ子だったせいもありますね」

ビジネスマンを経て弁護士の道へ

法学部と経済学部を卒業後、全日空（ＡＮＡ）に入社。東京支店・営業本部で営業企画やマーケティングの激務をこなし、好きな落語からは離れてしまいました。が、当時、仕事上の縁があって、落語会で知己を得た、今の師匠である金原亭馬生さんと三遊亭圓楽さんとは30年来のつきあいが続いているとか。

もともと法律家志望ではなかった菅原さんですが、法務部に異動したのをきっかけに、司法試験にチャレンジします。「模擬試験を受けてみたら、自分に向いていると思った」からだそう。働きながら、ほとんど独学に近い形で、週末のみ慶應義塾の司法研究室に通って猛勉強。旧司法試験の当時は例年3万人が挑戦して、5百人位しか合格しないという最難関試験に3回目で、しかも在職中に合格したのです。37歳の時でした。翌年ＡＮＡを退社し、司法修習生に。１９９６年弁護士登録（東京弁護士会）し、ＡＮＡグループの企業内弁護士を数年勤めた後、小林綜合法律事務所へ移籍。10年前から慶應義塾大学法科大学院で実務中心の法曹教育にも携わり、今年からは法務省の法制審議会委員にも任命されました。

1日36時間ほしい…

落語を再開したのは5年前。霞が関寄席で金原亭馬吉さんの独演会の折、出演依頼されたのがきっかけでした。現在もＡＮＡグループの経営サポートを中心に弁護士活動をしているので、海外出張も多く、超多忙。そのすき間を縫うように稽古時間をとります。「落語というのは映画監督をやっているような感じ。1席を語りこんで、完成させるには3カ月かかります。1日36時間ほしいですね」。落語をやるのは、弁護士という難しい仕事の息抜きになりそうですが、さにあらず。「肩筋からあとで批評をうけるので、かえってプレッシャーになるんですよ」と苦笑い。息抜きは週1回通うジムで汗を流すことだけ。才能の上に努力を重ね、弁護士と落語家、両方とも菅原さんの天職ではないでしょうか。

（東久留米市在住）